

行方市出身作家座談会



きむら
木村さおり さん

- ▶フリーアナウンサー
- ▶Lucky FM 茨城放送でパーソナリティとして活動中
- ▶なめがた未来のまちづくり協議会委員

ぬかがみお
額賀澤 さん

- ▶旧麻生町出身
- ▶2015年、第22回松本清張賞 第16回小学館文庫小説賞受賞
- ▶行方市シティプロモーション推進懇談会委員

こばやしみつえ
小林光恵 さん

- ▶旧玉造町出身
- ▶漫画『おたんこナース』の原作者
- ▶なめがた大使・行方市シティプロモーション推進懇談会委員

11月15日（月）、行方の魅力の再発見やシビックプライドの醸成を目的に、本市未来のまちづくり協議会委員の木村アナウンサーを聞き手に迎え、本市シティプロモーション推進懇談会委員の女性作家二人による座談会を開催しました。今号、次号の2回に分け、前編はお二人のマイヒストリー（行方からの巣立ち前、巣立ち後）についてお送りします。

1. 自己紹介

木村 本日は、お忙しい中、ありがとうございます。それではこれより、行方市出身作家座談会を開催します。座談会ということではありますけど、お二人には、和やかな雰囲気、楽しくお話していただければと思います。どうぞよろしくお願いします。進行は、フリーアナウンサーの木村さおりです。なめがた未来のまちづくり協議会の委員もさせていただいております。どうぞよろしくお願いします。では、最初に小林光恵さん、額賀澤さんに自己紹介をお願いします。始めに小林さんからよろしいでしょうか。

小林 旧玉造町出身の小林光恵です。看護師をしていました。そのあとに、作家、といってもフリーライターとして文章を書いてまいりました。今日はよろしくお願いします。

木村 額賀さんお願いします。
額賀 旧麻生町出身です。小説家

の額賀澤です。よろしく願います。

2. マイヒストリー

木村 まずは、行方市を巣立たれる前までのヒストリーを、お二人に伺いたいと思います。お二人とも高校卒業までは、行方市にお住まいだったということで、当時の思い出を伺いたいと思います。額賀さんは、麻生第一中学校から清真学園に進まれていますけど、小学校、中学校で夢中になったことってありますか？

額賀 そうですね、小学校と中学校は、統廃合でもうなくなっただけですけど、図書室が好きだった記憶があります。すごく図書室に行っていました。当時私が通っていた麻生町の太田小学校って、校庭に古墳がある小学校だったんですけど、その図書室には、本がたくさん置いてあったので、そこに通っていろいろな本を読んだ記憶はすごくあります。図書委員に

も入って、貸し出しをやった。
した。

木村 本好きの少女だったんですね。10歳の時に初めて小説を書かれたということで、どんな内容だったか覚えていますか。

額賀 主人公は、確か小学生の女の子で、その女の子のところに男の子の転校生がやってくるという話です。当時図書室で読んでいた児童書の内容に影響を受けて、書いたようなお話でした。

木村 やっぱり小学時代の出来事に影響を受けたんですね。

額賀 図書室で読んだ本から、これ好きだな、こういうのをやってみてみたいなって影響を受けて、10歳の時に書き始めました。

木村 小林さん、10歳で作品を書くというのはどうですか。

小林 早いですね。私は小学校の時には、一度も図書室行かなかった気がするし、本を読み出したのは高校生の頃です。気動車（鹿島鉄道）で銚田一高に通学しまして、その行き帰りに小説を読むようになったかなってくらいで、全然それまでは、漫画も読まなかったんですよ。

木村 小林さんは、当時の思い出として思い浮かべた事は、なんで

でしょうか。

小林 小学校は玉造小学校で、玉小の時は、歩く会で西蓮寺に行っただかなってという記憶はありますね。後は合唱クラブで、歌が好きではりきって練習していたことはよく覚えてますね。

木村 じゃあ看護師になられるっていうきっかけは、中学校の頃まではなかったんですね。

小林 はい。何も考えてなくて、高校3年生の時に、最終的に大学受験がうまくいなくて、どうしようってときに書店で調べたら、看護学校のことが書いてあったので、そこに進学しました。

木村 話は変わりますが、小林さんが玉造、額賀さんが麻生ということですけども、同じ行方市でも地域が違うと思うのですが、子どもの頃に、行き来はありましたか。

額賀 行き来はしますね。

小林 麻生は遠いというか、車がないとどこかに行かなかったです。

額賀 そうですね。自転車で行ける範囲で動いてましたね。多分玉造の人って、玉造を出なくても大丈夫じゃないですか。

小林 いや、麻生も完結してますよ。麻生は栄えてるから。

額賀 いや、麻生は意外と玉造行かないと、そろわないうところがありますね。

小林 いろいろなお店があつて、栄えているイメージがありましたけど。

額賀 栄えてるのは玉造ですね。玉造の方が学校も大きかったし。

3. 行方市を巣立つてから

木村 これからお二人には、外から見た行方市というテーマで伺いたいと思うのですが、その前にお二人のこれまでの活躍を私の方から紹介しつつ、お話を伺っていききたいと思います。まず小林さんから。先ほどの自己紹介にもありましたが、東京警察病院看護専門学校を卒業後、看護師、そして編集者などを経て著述業へ向かい、今に至っています。なんとこれも小林さんといえば「おたんと

ナス」。漫画原作者として、皆さんご存じではないかと思えます。最近では、さまざまな分野に活動を広げてますが、看護師時代のエピソードを作品にしたいと思ったきっかけは、なんででしょうか。

小林 私、自分では全く書くとは思ってなかったんですが、本が好きなので、編集の仕事の方へ進んだんですね。元看護師だと言うと編集の人って、看護師の時のことを聞きたがるんですよね。当時は、バブルの名残で、飲み会とか出版パーティーとかが多かったんです。そこで看護師時代の話をしたら、それをそのまま書いてくださいって強く勧められました。作文の成績も中ぐらいだったので、絶対だめだと言ったのですが、でも、編集の人に絶対大丈夫と言われて書いてみたら売れたので「次も書きましようか」ということになったんですよ。

木村 パーティーとかで看護師のお話をされてる小林さんの姿や、話の内容を聞いて、編集の人がこれはいけると思ったんですね。

小林 時代もあると思います。本を初めて出した90年代の初め頃には、看護のことを軽いタッチのエッセーに書く人が少なかったん



ですよね。看護の道を案内するとか、医療のあり方についての問題提起するなどの本を書く人はいました。休憩室の雑談みたいに書いた本はなかったから、売れると思っただけでしょうね。

木村 確かにそうですね。今までは違った視点で、看護師の世界や医療現場の世界を教えてもらったという思いがありました。

小林 なんとなく看護師という職業を選んだ女の子が書きましたといった感じで書きましようって編集の人に言われて書いたら売れて、ドラマに使われたりして、次々って感じになっちゃったんですね。文章は全然だめっていうところからのスタートでした。10歳で小説を書いた額賀さんと全然違うんです。

額賀 下手っぴな小説でしたよ。多分もうどこにもないと思います。あの頃だったんで、大掃除とか、中学校に進級したタイミングで捨てたんですよね。

小林 それ、もったいないですね。
額賀 もったいない気はしますよね。今読むと恥ずかしくなるかもしれないですけど。

木村 それが額賀さんのスタートですからね。小林さんはその後、

女性の生き方をテーマにした小説や、みとり、エンゼルメイクに関する著作を手がけられていますよね。私は、エンゼルメイクにすごく興味があるんですけども、取り組んだ理由はありますか。

小林 2年間の病院勤務時の体験が、ものすごく強烈でした。亡くなる人が多い病棟で、その方たちの対応をしたわけなんです。私が小さい頃は、近親者が家でご遺体を囲んでみとって、大切に処置した記憶があるので、病院で処置的に済ますということが残念で、病院をやめてからもいつか検討したいとずっと思っていました。2001年に、ついに研究会を足して、検討を始めたらすごく反響が大きかったです。漫画「おたんこナース」も、全体の半分くらいは、その2年間の実体験が物語になっていきます。

木村 みとりというのは、私たちにとって、切っても切り離せない

ものですよね。

小林 はい。私は、看護師になるまで身近な人が亡くなったということがなくて、日常の時間の中で人が亡くなるということを肌を感じ、とてもびっくりしました。衝撃が大きくて、そこに居合わせた人として何ができるかを考えました。

木村 エンゼルメイクについてご説明が必要かもしれません。死化粧という言い方もあります。

小林 亡くなった人の身だしなみの整えですね。お顔を中心として全身をその人らしく整えることがエンゼルメイクです。

木村 亡くなった方も、遺された方々も癒やされますね。

小林 そうですね。人が亡くなることは、本人には分かりません。周りの人にとっての出来事で、周りの人がどう思うか、どう記憶に残すかが大事ですね。儀礼もいろいろ行われてきましたが、どんな

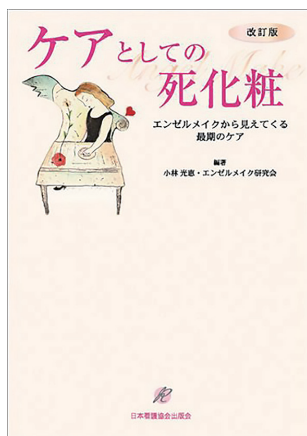
ん省略されてるのが現実ですね。
木村 だんだん簡素化されていますものね。

小林 時代の流れなのでしょうけど、人が誰かを亡くすことって人生の中で大きな営みですから、それをどういう風に考えていくか、これからのみとりについて、みんな考えていきたいと思っています。

木村 エンゼルメイクを知っているだけでも違いますものね。

小林 例えば、唇の色がちょっと元気な頃のようになったとかでも、家族の方にとってはすごく大切なことだし、一方で唇の色ひとつで全然その人ではなくなってしまうということもあります。顔は周囲のみんなでも共有しているものだから、場合によっては、周囲の人が本人より顔を見えますからね。その顔を最後に見て、ちょっと穏やかな顔をしていれば良かったと思えますからね。そういうことなどをテーマにしています。

木村 そして額賀さんですけども、日本大学芸術学部文芸学科を卒業後、広告代理店勤務を経て著述業へ、ということ、作家として活躍中です。2015年「屋上のウインドノーツ」で松本清張賞



を受賞しました。6年前ですが、いかがですか。

額賀 やっと6年たったのかという感じですね。

木村 受賞された時は、どんなお気持ちでしたか。

額賀 受賞した時はうれしかったですよ。「やったー」という気持ちと、出版、編集、ライター、写真撮影などやっているような広告の会社にいたので、本や小説を書いてご飯を食べていくのが、どれだけ大変かということが分かっていたので、ここからすごく大変だなという気持ちがありました。大変だなと思うまま、6年経ちました。

木村 その間にもさまざまな著作を発表されています。

額賀 ひたすら書きました。

木村 行方市周辺が舞台かなと思われる小説も書いてますね。例えば、鹿行地域出身の主人公だと思わせるのが、箱根駅伝にまつわる小説ですね。

小林 読ませていただきました。

額賀 ありがとうございます。

小林 名字がね、眞家さん、井坂さん、助川さんって同級生にもいた名前ですね。

木村 行方市に多い名字ですか。



額賀 クラスメイトにいる名前ですよね。眞家さんは絶対にいました。

小林 最後の頃に、女の子がバイトしている女将さんの名前が私と同じ名前だったの、光恵っていう名前。漢字も同じでうれしかったです。

額賀 一瞬だけ、最後一回だけ出てくるんですよ。

小林 すごく喜びでした。

木村 そこにも行方らしさが。

額賀 名字を書くときは、その土地に多い名前ってあるじゃないですか。その辺を拾うことが多くて、「タスキメシ」はそれがすごい多かったです。高校の時のクラスメイトに似た名字だと思いながら、書いたりしました。

木村 じゃあクラスメイトの方が読んだら、私の名字使ったと思われるかもしれないですね。

額賀 ありました。当時の同級生が関西で先生をしてるんですけど



ど、気づいてくれたみたいです。その子のお母さんは、鹿行地域で先生をしているので、声をかけてもらいました。

木村 小説家を目指そうと思ったのは、本が好きだった、書くのが好きだったところからですか？

額賀 ずっと本を読むのが好きで、作家になりたいなってぼんやり思いながら、中学時代を過ごしてました。高校に入学したくらいで、みんな将来の夢を語ってたのが具体的な話を始めますよね。大学どこに行くかとか、どういう専門学校に行くかとか考え始めた時、自分も考え始めて、もう少し文章を書く勉強をしたいと思って日大の芸術学部を選びました。

木村 書くことをイメージに据えて、大学を選んだんですね。

額賀 何かしら書く仕事ができないかと思って、広告作りながら編集も記事も、ついでに写真も撮っ

てみたいな会社に入社しましたけど、結果的に思ってた通りになりましたね。

木村 夢を叶えられたわけですからね。額賀さんが小説を書く上で、大事にしていることはありますか。

額賀 部活、スポーツ、仕事などを題材に話を書くんですけど、実際にそれらに取り組んでいる人がいるじゃないですか。その人たちがちゃんと認識した上で「これが書きたいがために、この題材を当てただけだね」という風にはしたくないですね。例えば「タスキメシ」は、駅伝の話でしたけど「この話って駅伝である必要があった？」っていう風になるパターンにはしたくないです。実際にやっている人たちから、物語を書くのに使われたと映る時があるので、そう映らないように駅伝を書くんだったら、駅伝以外のものに替えがきかない物語にしようと思って書いてます。

木村 「タスキメシ」、やっぱり駅伝じゃなかったら成り立っていないと思います。他のスポーツでも成り立ってないとも思いましたね。

額賀 そこは気をつけました。

(次号に続く)